

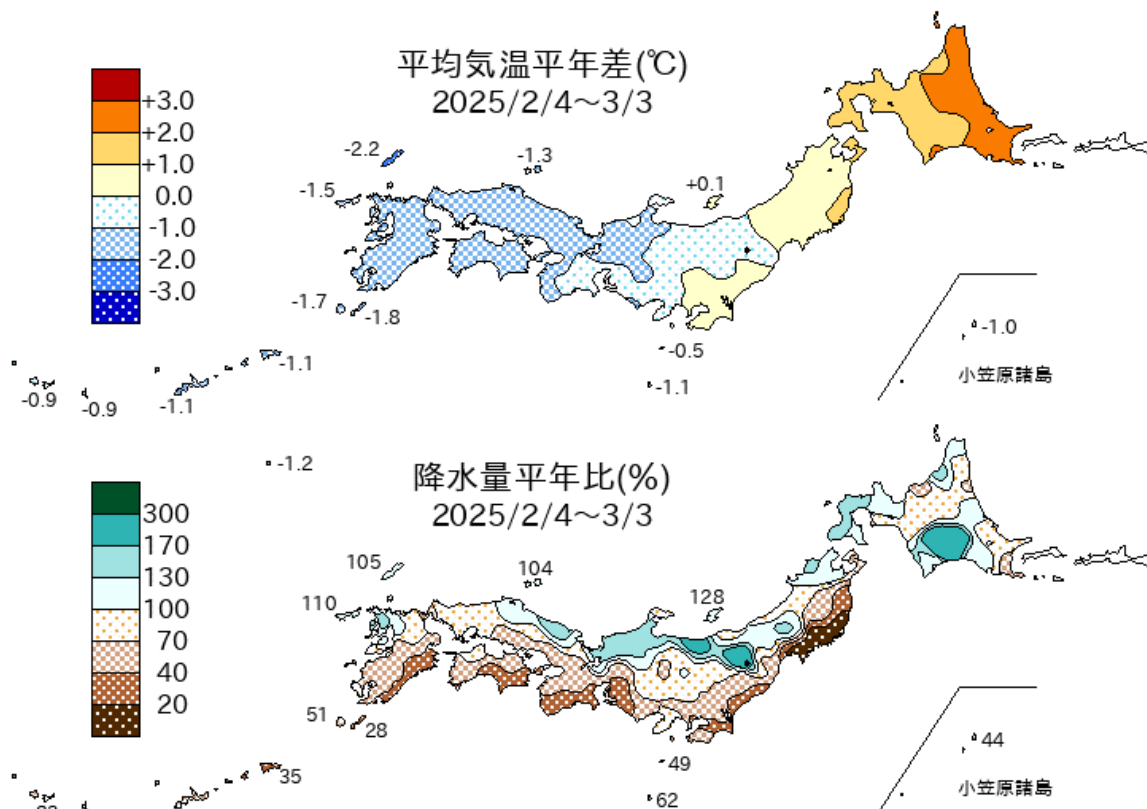
今年の冬、当初今年の2月は「平年並みか暖か」との気象予報でしたが下旬になっても寒さは去らず、月末になって唐突に3月末の気温が2、3日続いたものの、長続きはせず。3月に入って再び寒波の襲来等、不順な気象となっています。また、気温もありますが、極端に降雨の少ないのも今年の冬季の気象であったと思われます。この影響か樹木類の開花も例年になく遅れ、この花だよりもネタ不足で休止状態になっていました。3号をお届けし半月以上となりますので取り敢えず、周囲の変化だけでなく入手した情報等交え書き下そうかなと思っています。

例によって、気象の経過状況、および今後の予報から書きはじめます。

1. この冬の総括

1. これまでの気象の経過状況と見通し

1-1. これまでの4週間の全国の天候経過（気象庁3月5日発表）



*この気象の経過図から2月初旬から3月までの全国の気温と降水量（いずれも平年比ですが・・・）の傾向が読み取れると思います。気温に関しては兵庫以西の西日本で平年より1～2度低く、本州中央部では1℃程度低いか平年並み、東北・北海道では平年よりかなり高めであったことが分かります。また、降水・降雪量についても西日本・東海・関東太平洋側で平年を下回り、特に神戸・大阪周辺では平年の

40～70%となっていますが・・・これは3月2、3日の降水が加えられての表示、2月末までであれば20%以下ランクに入りでした。なお、一向に衰えを見せない大船渡地区の山林火災も極端な乾燥状態にあったことが要因でしょう。但馬以東の日本海側、北海道で部分的な多雪となったことも分かります。

1－2. 神戸の冬季のお天気経過は・・・

参考の為、住居近くの神戸地方気象台の冬期3ヶ月の気温と降水量の観測値がどのようであったかを平年値と最近の4年間の状況と比較しを右に挙げておきます。気温については気象台の予報通り12月、1月上旬までは均して見れば平年並みか若干低い気温となりましたが、大きく狂ったのが2月の気温、「平年並みか若干高いの」予報は完全に外れ、平年を1.2℃、暖冬であった昨年を3.4℃も下回る結果となってしまいました。でも、全体的にはラニーニャの影響をもろに受けた2022年よりは積算温度は高い値となっています。むしろ、昨年在異常な暖冬だったと言えたら良いのですが。

気温℃	12月	1月	2月	冬期積算温度
平年値	8.8	6.2	6.5	6 4 7
2021年度	8.8	6.1	8.8	7 0 8
2022年度	8.9	5.6	5.7	6 0 9
2023年度	7.9	6.6	7.2	6 5 1
2024年度	9.7	7.2	8.7	7 7 1
2025年度	8.6	6.7	5.3	6 2 2

降水量mm	12月	1月	2月	冬期積算雨量
平年値	49	38	56	143
2021年度	13	55	34	102
2022年度	45	17	18	80
2023年度	18	55	28	101
2024年度	19	16	94	129
2025年度	0.5	24.5	14	39

一方異常と言えるのは降雨量の方である。前報でも触れたがは相変わらず少雨状況、12月は0.5mmと極端に少なく、1月も24.5mm、2月も14mm、冬季90日間全体でも**39mm**と極端な少雨状態でした。日頃の散策途中でクスギ・アベマキ林などにはいると、昨年、秋の気温高から、遅れて落葉した葉がそのまま堆積して残り、落ち葉の下に地面も乾いて全く分解の様相は全く見られない状態が観測されました。こんなところに火種があれば・・・結果は大船渡をはじめ、山梨、長野が証明していますね。

なお、前述して来た当地での「ロウバイ」の開花状況（蕾の落下、まばらな開花、花期遅れなど）にもこの降雨不足が影響したのではないかと思います。

今後は？ 最近発表された大阪管区気象台の向こう4週間の予報は下記の通りです。

1－3. 近畿地域の向こう1ヶ月の天気予報（大阪管区気象台3月1日発表）

全国的には期間の前半は北・東日本を中心に冬型の気圧配置が強まる時期があるでしょう。また、期間の後半は北日本を中心に低気圧の影響を受けやすい時期がある見込みです。なお、東・西日本太平洋側では低気圧の影響を受けにくいでしょう。

近畿地方（3/1～3/28）

予報のポイント

向こう1ヶ月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため、平年並か高いでしょう。1週目の気温は高く、2週目のはじめにかけて気温の変動が大きいでしょう。

向こう1ヶ月の天候

近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう

＊平均気温低20並40高40%平年並みか高い 降水量少40並30多30%**ほぼ平年並**の見込み

第1週目（3/1～3/7）天気は数日の周期で変わりますが、低気圧や前線の影響を受けやすいため、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。 気温：低10並30高60%**高い**見込み

第2週目（3/8～3/14）近畿日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。近畿太平洋側では、天

気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温：低 30 並 50 高 20% 平年並の見込み

3~4 週目 (3/15~3/28) 天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。 気温：低 30 並 40 高 30%ほぼ平年並の見込み

2. ウメ（白梅）の開花

第2報に記載しましたように、気象庁の「生物季節観測」の項目には春期の桜以外にウメの開花日が継続観測されて来ています。今年は前述のように西日本地区の冬季気温が低目であった為、各地とも開花が遅れ地域によっては平年、開花の早かった昨年にと比べると 20~30 日も開花が遅れた地域も出てきています。この附近でも 2 月末の温暖な日以降にやっと彼方此方で開花が目につくようになりました。中には一気に満開近く開花した樹も見かけられます。

気象庁の開花発表では、今年の最速地は 1 月 7 日の沖縄、本州では昨年同様松山の 1 月 20 日ですが、昨年より 31 日遅い記録です。近畿地区で既報のように神戸がトップで 2 月 12 日（平年より 6 日遅れ、昨年より 24 日遅い）、続いて奈良が 2 月 15 日（平年比 15 日遅い、昨年比 31 日遅れ）、和歌山 2 月 19 日（平年比 7 日、昨年比 20 日遅れ）、大阪が 2 月 27 日（平年比 14 日、昨年比 25 日遅れ）、彦根 3 月 3 日（平年比 11 日、昨年比 30 日の遅れ）となっています。

なお、京都はまだ開花宣言されていません。昨年は 2 月 14 日の開花でしたが……。観測標準木の関係か例年一番遅いのが京都です。 右の画像は近所の「源平」咲きのウメです。



3. 「ヒカンザクラ」の開花・満開の情報

奄美・沖縄地区の気象庁・生物季節観測のサクラ基準樹種としてはヒカンザクラが選ばれていますが、先報では同地区 4 ヶ所での開花を記述しました。その後満開が報じられているのは、宮古島のみ、2 月 4 日で平年より 5 日早く昨年より 2 日遅いです。宮古島では過去 2 回開花しても満開には至らない年がありましたが今年は満開が記録されました。3 月 5 日時点で、沖縄、奄美での満開の報告は入っていません。例年奄美・沖縄地区では開花後 15~20 日程度で満開となるのが普通ですが、この地域も例年に比べ気温が低めに推移しているので開花期が長くなっているのであろうと思っています。

近くの芦屋川沿いの公園での本種観測地での開花は、昨年は 2 月 18 日でしたが、今年はかなり遅れそうです。3 月 6 日の観察では右の画像のように、やっと蕾が顔を出したという程度でした。開花は 10 日前後になると思います。



4. 今年のサクラ（ソメイヨシノ）の開花予想

サクラの開花予想日は毎年、天気予報の各社が独自の見方で行って来ていますが、今年は日本気象株式会社の公表して来ている「今年の桜の開花予想」を取り上げ、紹介して来ています。

本報では 2025 年 2 月 27 日に発表された本年度第 6 回目の開花予想を紹介しておきます。

*全国的に平年並みか平年より遅めの開花に

今シーズンは全国的に休眠打破の時期は平年より遅くなった見込みです。北日本では休眠打破後にその遅れを取り戻す予想ですが、東日本・西日本では休眠打破の遅れの影響が響く見込みで、全国的に平年並みか平年より遅めの開花となる地点が多いでしょう。 前回の発表と比べて、3 月の気温が前回より高く推移する予想に変わったため、東日本・西日本で開花予想日が 1～2 日早くなっています。

3 月 24 日に東京で開花がスタートし、続いて四国地方、九州地方、東海地方でも開花し始める予想となっています。

[東日本・西日本]

東日本では、10 月は平年よりかなり高め、11 月は平年より高め、12 月は平年並み、1 月は平年より高め、2 月は平年より低めの気温でした。 西日本では、10 月から 11 月にかけては平年よりかなり高め、12 月から 1 月にかけては平年並み、2 月は平年よりかなり低めの気温でした。 10 月から 11 月にかけての高温の影響で、休眠打破の時期は 1 週間程度遅くなる見込みです。 東日本・西日本では 3 月は平年より高めの気温が予想されています。 **開花時期は、東日本では平年並み、西日本では平年より遅いでしょう。**

*なお、近畿地区の開花予想日は、開花は、平年並みか平年より遅い 10 月から 11 月にかけては平年よりかなり高め、12 月は平年並み、1 月は平年より高め、2 月は平年より低めの気温でした。3 月は平年並みの気温が予想されるため、開花は、平年並みか平年より遅くなる見込み。大阪が 3 月 29 日（平年並み）、京都市 3 月 29 日（平年より 2 日早く、昨年より 3 日遅い）、和歌山 3 月 28 日（平年より 4 日遅い）などです。

*各社の予報も似たようなもの、2 月の気温が西日本、東日本で平年を下回った為、平年より早いから→平年並みと変わって来ています。上記社では、一貫して今年は「休眠打破」が遅れているとの見解。11 月の高温を加味しての見解ですが・・・正しいでしょうか？

右は、ここ数年行っている切り枝の、加温テストの結果の紹介。2 月 1 日以前の切り枝は冬芽の展開はありませんでしたが・・・2 月 11 日の切り枝では花芽 11 個のうち 1 個が 2 月 27 頃から開花始め 3 日には写真のように 1 個の花芽から 3 個の花が開きました。逆算すると少なくとも 2 月 5 日前後には「休眠打破」がなされていると見るのが妥当。n 数が全体の花芽 5 千個～に比べれば極少数ですが「花が咲いた」は事実。毎年開花日から気温データを用いて逆算して推定している「休眠打破」日と平年と同程度か早め、決して遅れているとは言えないとおもいます。例年なみであり決して休眠打破が遅れているとは言えないように思います。



気象予報士ではありませんが、3月初旬に戻り寒波、これを考慮すると気象庁の上記の予報を参考とするなら「平年並み」の開花となるのではないのでしょうか。雨不足の神戸地区も3月上旬の降水量が38.5mmの慈雨、心配された揚水もこれで取り戻せるのではないかと考えています。

開花日はともかく、昨年並みの枝先までの一斉開花を期待しましょう。

5. 日本の早咲きサクラの開花情報

既報のように、本州の早咲きザクラの開花もこの冬の気温状況からニュースや地域の観光協会の資料などから可成り遅れたこととお知らせ致しました。一番早く見頃を迎える**アタミザクラ**も熱海市が開催した『桜まつり』1月末までの期間中には5分咲きまで、その後5~10日後に満開期を迎え、見頃になったとのことでした。一方、同じく早咲きの**カワズザクラ**も伊豆半島の河津町が毎年2月の1ヶ月間を「桜まつり」に設定、集客を募っていますが・・・こちらも今年の開花は2月の中旬、月末近くまで2分咲き程度まで2月末の異常な気温上昇で一気に5分咲きから満開となったとのこと、町では「祭り」期間を一週間延長したと伝えられています。最近、ニュースで長された湯河原温泉の満開の桜もこの**カワズザクラ**ではなかったかと思います。

なお、当方が観測場所としている芦屋市の東山公園の**カワズザクラ**は3月6日午前時点で、3ヶ所で右のような開花状況でした。夕方までには2, 3個はさくでしょうから、本日を本年度の開花日としておきます。

もう、1ヶ所同じく芦屋市内の宮川沿いのマンションの庭に植えられている**カワズザクラ**も観察対象にしていますが、本日現在開花は見られていません。通常上記の観察木より開花は2, 3日遅いので今週の土、日（7, 8日）の開花となるのではないかと考えています。



6. マンサク

本報は「花だより」としてしますので、一筆啓上。

写真画像を見られれば何の花かは説明不要でしょうが、名の由来の通り、まず咲くですね。また、2月24日の夕方、散策時に下方の蕾が2, 3個開き開花が認められ、やっと開花が始まったかでしたが、3日後の朝右の写真のように満開になっているのには驚かされました。樹木の花など通常は数日かけて順次ボツボツ咲くのが普通などと思っていましたが、ほぼ一斉開花したようです。今年は豊年満作となるのでしょうか、米価高騰の折、是非そうあってほしいものですね。



7. カタバミについて

先報では、オオキバナカタバミの拡大と、既存植物への影響について記述しました。オオキバナカタバミほどには目立ちませんが、ムラサキカタバミやイモカタバミさらに花壇などから逸出した花カタバミなどもこの附近ではニッチを増やして来て在来植生への影響を懸念していることは昨年度の花だよりでも記述したように思います。この附近の話ではありませんが・・・購読している毎日新聞の2月28日の夕刊のトップ記事として「**都会の道端 カタバミ なぜ赤い？**」という見出しの文が掲載されていたので紹介しておきます。

・将来のさらなる地球温暖化を先取りするように、身近な植物が進化した一。世界に先駆けた発見の糸口は、ふとした偶然から訪れた。「世界的」発見 散歩が出发点

という書き出しから始まっている記事。

・この発見者は千葉大・深野裕也准教授（生態学）・・・2020年初夏に、東京都杉並区の住宅街を、散歩中に、目に付いたのは、アスファルトの路面にへばりつくように生えているカタバミの赤い葉だった。

そして、疑問に思った。芝生や畑のまわりでは緑色の葉のカタバミしか見かけないなぜ色が違うのであろう一。そして、仮説をたてた。

「都市部のアスファルト道のように夏季の高温が、カタバミを緑色に進化させたのではないか」

・手始めに、東京近郊でカタバミの葉の色を調べた結果、都市部では赤色が5割を超え、農地や緑地ではほぼ全てが緑色であった。

・実験室や温室を使って、温度を変えて栽培観察の結果、35℃の高温で緑色個体は光合成力が低下、枯れてしまうのに対して赤い葉の個体は光合成度が大きく低下せず、良く成長した。気温が25℃の場合はこの逆、緑色個体の方が光合成能力は高く良く成長した。

・世界各地の観察アプリのデーター分析でも、都市部の市街地の道路の方が、緑地より赤い葉の割合が分かった。

（注：緑色のカタバミと赤葉のカタバミの遺伝子は異なる一進化の経路は複雑。赤色はアントシアニン）

・今後の地球温暖化で赤色葉が増えるのでは。

・なお、「2023年上記の論文が米誌に発表」されて以来海外でも温暖化による植物の進化の研究に取り組む学者が増えて来ている...オランダでは都市部のタンポポが農村部のものに比べ高い温度でよく成長するように進化して来ているという研究発表も出て来ているとのこと。

*本件に興味を持たれた方は・・・

Yahoo で「アカカタバミ」で検索すると

「都市の熱さで植物は赤く進化する ―ヒートアイランドへの急速な適応進化を初めて実証―」

東京大学・大学院農学生命科学研究科・農学部

という論文（難しくありません）が出てきます。ぜひ一読下さい。

*上記の記事を読んでから、近所の舗装路を歩く時には道路の縁を覗き歩いているのですが、カタバミ自体をあまり見かけません。たまに見かけても「緑色の葉」のモチ主です。お近くで見かけられたら写真と撮影場所などお知らせ頂ければ幸いです。

*地球温暖化の影響はこの「アカカタバミ」以外にも色々見られるのではないのでしょうか？先の武田尾観察会ではセンニンソウが青々とした葉を広げていました。常緑化はここ2、3年のことです。

*散歩も単に歩くだけでは在りませんね。観ることの大切さ改めて感じる1事です。

8. 雑件

前報で「冬芽」とはどう定義するかと問いかけ致しましたが意見を頂いた方はありませんでした。

でも、皆さんも冬季の観察会では必ずこの言葉「冬芽」を使われているとおもいますが……。少しでも考えて頂ければ良いかなです。

前報の「……」内は最近の観察会で、リーダー担当者が説明されたもの。田中修先生の著書にはこのように記載されているからとのことです。

Yahooなどで「冬芽の定義」など入れて検索しても、Ans.は様々。

*以下私の解釈……不同ですが……

- ・「冬芽」の言葉自体問題「越冬芽」とすべき。

(何となく前報の「……」の芽の生成夏以前→晩夏に休眠芽→「休眠打破」→開花・展葉が定着
しかし、前報の加温テストでは「休眠打破（低温期）」無くとも開花や展葉するものが多いことを
実証。むしろ、休眠打破の低温期を必要とするのはサクラ等バラ科の一部の樹種だけではないので
しょうか……。梨について「休眠打破」の必要性は発表されているが……。バラ科。)

- ・「越冬芽」は落葉樹に限らず「常緑樹」にも存在する。芽の生成時期は春～秋、生成の時期は問わな

- ・「芽」を開くには、3つの要素が必要……。『気温』、『水分と養分の供給』

- ・上記の3要素を欠くのが冬季、よって成長を休止する。……。葉っぱなどより小さな「芽」の状態
過ごす方が格安・安全、凍結防止などに使われる養分（糖等の濃度上昇用）も少なくすむ。

- ・「鱗芽」「裸芽の毛」は寒さをしのぐ役目をする？……。『嘘でしょう』 小さな鱗芽で外部と内部
で 温度差がつくなど考えられません。木部でも凍裂することさえあるのに……。南方系の常緑樹
でも夏期ですら鱗芽をつくります。鱗芽など寒さではなく、紫外線対策、風雪、野鳥などの食害から
「芽」を守る手段と考えた方がリズナブル。

- ・落葉樹の揚水……。長い植物史の中で、葉だけでなく、枝・幹など自体も日長（暗期）を感知する能力
を備えて来ている可能性大。冬至以降は日長は長くなる……。これを感じて温かい春の到来を予見
して2月始めごろから開花や展葉に備え揚水を始める。1年枝には葉と同様な能力がある（自説）。
・常緑樹では、もっと単純、古い葉が存在し、蒸散による揚水、葉による養分の合成が可能であり、
気温の上昇のみで展葉・開花する。

(例) タブの鱗芽（頂芽のみ）の展開は奄美では2月に観察、この附近では4月中旬ですね。

*「越冬芽」定義は成長に不都合な季節(冬季)に成長を休止し葉でなく「芽」の形で過ごす。

中には、「一定の低温期」が必要な「芽」も含まれる。

ご意見はいかがでしょうか？

*樹木の髓の件

科内Sさんとの会話の中で、植物の髓は「白色」ではないのか？とのご指摘を受けました。多分、次ページの「イヌビワ」の画像の話からおもいますが……。左下は、ヤマブキから抜きだした「髓」確かに白色です。



でも、その右はソメイヨシノの幹の断面の画像ですが髄は白色ではありません。

いろいろ樹木の茎を切ってみると色んな生き様が垣間見られます。2, 3 挙げておきます。

・右が、イヌビワの茎を切ったもの、髄は白色、細胞が大きい？ところまで見とれるのではないのでしょうか。それもあります、皮下組織の色にもご注目下さい。緑色の相も厚いですね。この部分には葉緑素と共にカロテノイドが共存するはず。よって、この枝及び越冬芽が緑色のまま、冬季の紫外線に対処出来ていると考えられます。なお、これまでの例で...低木（株立ち種など）では草本に近く、髄が太い傾向にあるのではないかと思います。

・比較の為、エノキの枝の断面写真も右に並べておきます。一応高木ですから、1 年枝でも上記などと比べると髄が細く不鮮明であるように思います。

・下はつる性植物・クズの茎の断面写真です。つる性植物も髄が太い特徴を持つようです。なお、この画像を拡大していただくと、道管が見られるはずです。お試し下さい。

28 日、科の武田尾観察会では切り枝しましたので、髄の観察も入れました。



アオキなど低木の髄は太いこと、ヤマブキの太い髄も年数がたつと消滅し空洞となることなど新しい知見も得られました。

本報は以上まで。